第７章　叙法辞

この章では叙法辞の機能を扱う。この章の構成は以下のとおりである。

1　叙法辞の概略
2　*ké'* (不確定)
　2.1　*ké'*の表す意味
　2.2　*ké'*の現れる統語的位置
3　*mo* (起動・妥当)
　3.1　*mo* の表す意味
　3.2　*mo* の現れる統語的位置
4　*po* (必要な条件)
　4.1　*po* の表す意味
　4.2　*po* の現れる統語的位置
5　*ké, mo, po*の文中での位置と談話の焦点
6　*si* (対比)
　6.1　*si* の表す意味
　6.2　*si* と共起しやすい要素
　6.3　*si* の現れる統語的位置
　6.4　*si* の統語的位置と文の意味の対応
7　叙法辞の機能のまとめ

１　叙法辞の概略

叙法辞については既に第5章10.3で触れた。叙法辞には次の四つがある。それぞれの機能の概略は以下のとおりである。

(i) *ké'*（不確定）:当該の命題が正しいかどうかが話者にとって不確かである場合に用いられる。
(ii) *mo*　（起動・妥当）：述部の主要部が持続時間を持つ状況を表す場合は、その状況の起動を表す。また、その実現が、何らかの形で、妥当ななりゆきであると話者がとらえている場合に用いられる。
(iii) *po*　（必要な条件）：当該の命題の表す状況の実現が、別の状況が生起するために必要な条件であると話者がとらえている場合に用いられる。
(iv) *si*　（対比）：当該の命題と何らかの形で対比される命題を話者が想定している場合に用いられる。

叙法辞の現れる位置は、相互に似通っていはいるものの、個々の叙法辞ごとにいくらか差異がある。
また、叙法辞のうち *ké', mo, po* の現れる位置は、文全体が表す命題中の談話の焦点と対応す

る場合がある。以下の部分では、まず、2〜4 で三つの叙法辞 *ké’, mo, po* について、その意味的、統語的機能を順に述べ、次に 5 でこれらの叙法辞が現れる位置と焦点との対応をについて述べる。その後 6 で叙法辞 *si* の機能を扱う。7 はまとめである。

2　*ké’*（不確定）

*ké’*は、当該の命題が正しいかどうかが、話者にとって不確かであることを伝える場合に用いられる。この節ではまず2.1で*ké’*の表す意味を扱う。2.2では*ké’*の現れる統語的位置について述べる。

2.1　*ké’*の表す意味

*ké’*は、当該の命題が正しいかどうかが話者にとって不確かであることを伝える場合に用いられる。多くの場合、*ké’*を含む文は疑問文として、つまり、話者が聞き手に命題の真偽に関する判断を求めるために用いられる。

(1)　*tau=Empang*　*nya*　*ké*?
　　person=Empang　3　INTERR
　　「彼はEmpangの人ですか。」

(2)　*sia=laló*　*kó’*　*Bali*　*ké’*?
　　2SG.HIGH=go　to　Bali　INTERR
　　「あなたはバリに行くのですか」

しかし、*ké’*を含む文が常に疑問文として用いられるわけではない。以下の例は物語のテキストからの引用である。ここでは話者は聞き手に真偽の判断を求めているわけではなく、単に命題の真偽の不確かさを提示していると考えられる。

(3)　*lè’,*　*lè’,*　*lè’,*　*lè’,*　*anak=ta=nan*　*masi*　*bai,*
　　long　long　long　long　child=this=that　still　baby

　　lalu=mentua=ta,　*ina’*　*lalu=KerékKuré=ta,*　*lalu*
　　TITLE=parent.in.law=this　mother　TITLE=KerékKuré=this　then

　　kalaló　*lakó’*　*dalam*　*dèsa.*
　　perf=go　to　inside　village

　　malóm　*tedu*　*pang’*　*keban*　*ano,*　*laló*　*buya=keperluan*　***ké’***
　　as.you.know　stay　at　field　that　go　look.for=necessariries　INTERR

　　beli=gula　***ké’***　*beli=apa*　***ké’***　*laló.*
　　buy=sugar　INTERR　buy=anything　INTERR　go

「（子どもが生まれた後）長い時間が過ぎ、子どもはまだ赤ちゃんだった、義母は、ラル・クレクレの母親は、村の中心部の方へ出かけて行った。姑は、クレクレの母は、村の中心に行っていた。ご存知のとおり畑の中にすんでいるのだから、必要なものを求めて**か**、砂糖を買

いに**か**、何を買いに**か**、出て行った。」[LK 075-076]

また、疑問文が必ず*ké'*を含むわけではない。この言語では、文末の上昇音調によっても疑問が表される。たとえば(4)は(1)に対応する*ké'*を含まない文である。この文は通常のイントネーションで発話された場合は「彼は*Empang*の人である」という内容を表し、文末を上昇音調で発話した場合には、「彼は*Empang*の人ですか」という内容を表す疑問文として用いられる。

(4)　*tau=Empangnya*?　　(上昇音調で)
　　person=Empang　　3
　　「彼はウンパンの人ですか。」

2.2　*ké'*の現れる統語的位置

ここでは *ké'*の現れる統語的位置を明らかにする。*ké'*の文中の位置は部分的に談話の焦点に対応している。この項 2.2 では *ké'*の現れる環境についてまず網羅的に例を示し、*ké'*の統語的位置と談話の焦点の関係については 5 で改めて述べる。

*ké'*は次の統語的位置に現れる。

[1] 文末
[2] 動詞を主要部とする述部内
[3] 動詞を主要部とする述部に先行する名詞句補語内
[4] 副詞成分内

*ké'*が[3]の補語内に現れるのは、文に副詞成分が現れない場合だけである。文に副詞成分が現れている場合は、*ké'*は[2]述部内と[4]副詞成分内のみに現れる。

以下の部分では、[1]-[4]それぞれの場合について順に例を示す。

[1]　*ké'*が文末に現れる場合

この場合、*ké'*に先行する文の語順には特に制約がない。*ké'*の直前の要素は述部である場合(5)(7)(9)(12)、補語である場合(6)(8)(10)(13)(14)、副詞成分である場合(11)(15)があるが、それによって*ké'*の示す談話の焦点に影響はない。（この点については5で述べる。）

・名詞句を述部の主要部とする文の文末に現れる場合

(5)　*nya*　*tau*　*Empang*　***ké'***?
　　3　person　Empang　INTERR
　　「彼はウンパンの人ですか？」

(6)　*tau=Empang*　*nya*　***ké'***?
　　person=Empang　3　INTERR　　「彼はウンパンの人ですか？」

・前置詞句を述部の主要部とする文の文末に現れる場合

(7)　*nya*　*pang'*　*Samawa'*　***ké'***?
　　3　at　Sumbawa　INTERR
　　「彼はスンバワにいますか？」

(8)　*pang’*　*Samawa’*　*nya*　***ké’***?
at　Sumbawa　3　INTERR
「彼はスンバワにいますか？」

・自動詞を述部の主要部とする文の文末に現れる場合

(9)　*nya*　*datang*　***ké’***?
3　come　INTERR
「彼は来ますか？」

(10)　*datang*　*nya*　***ké’***?
come　3　INTERR
「彼は来ますか？」

(11)　*nya*　*tedu*　*pang’*　*hotèl*　***ké’***?
3　stay　at　hotel　INTERR
「彼はホテルに滞在しているのですか？」

・他動詞を述部の主要部とする文の文末に現れる場合

(12)　*tepóng=nan*　*sia=kakan’*　***ké’***?
cake=that　2SG.HIGH=eat　INTERR
「あなたはそのお菓子を食べるのですか。」

(13)　*kakan’*　*tepóng=nan*　*léng*　*nya*　***ké’***?
eat　cake=that　by　3　INTERR
「彼がそのお菓子を食べるのですか？」

(14)　*nya*　*ka*　*mo*　*kakan’*　*tepóng=nan*　***ké’***?
3　PERF　occurr　eat　cake=that　INTERR
「彼はもうそのお菓子を食べましたか？」

(15)　*sia=beli=jangan’*　*sapèrap*　***ké’***?
2SG.HIGH=buy=fish　yesterday　INTERR
「あなたは昨日魚を買いましたか？」

[2] *ké’*が動詞を主要部とする述部内に現れる場合[1]

1　述部の主要部が副詞句、前置詞句である場合は、述部内に*ké’*が現れることはない。
(a)　**mèsa-mèsa’*　*ké’*　*nya*?
alone　INETERR　3
（期待される意味）「彼は一人ですか？」

動詞が述部の主要部である場合、文末以外の述部内に*ké’*が現れる場合がある。
述部が動詞のみからなる場合、*ké’*は述部末に現れる。
・述部の主要部が自動詞である場合

(16) *datang*　***ké’***　*nya*?
come　INTERR　3
「彼は来ますか？」

(17) *tedu*　***ké’***　*pang’*　*hotèl*　*nya*?
stay　INTERR　at　hotel　3
「彼はホテルに滞在していますか？」

・述部の主要部が他動詞である場合

(18) *kakan’*　***ké’***　*tepóng=nan*　*léng*　*nya*?
eat　INTERR　cake=that　by　3
「彼はそのお菓子を食べますか？」

*ké’*は、否定詞*nó*、アスペクト辞*ka*を含む述部内にも現れる。この場合、*ké’*はそれぞれの要素の後に現れる。以下に例を挙げる。

(19) *nó*　***ké’***　*datang*　*kóta*　*nya*?
NEG　INTERRcome　to.here　3
「彼はここに来ないのですか？」

(20) *ka*　***ké’***　*datang*　*kóta*　*nya*?
PERF　INTERR　come　to.here　3
「彼はここに来ますか？」

[3] *ké’*が動詞を主要部とする述部に先行する名詞句補語内に現れる場合

述部の主要部が動詞である場合、述部に先行する名詞句補語内に*ké’*が現れうる。

(21) *nya*　***ké’***　*datang*?
3　INTERR　come　「彼が来ますか？」

(22) *nya*　***ké’***　*tedu*　*pang’*　*hotel*?
3　INTERR　stay　at　hotel
「彼がホテルに泊まっているのですか？」

(b)　**pang*　*Samawa’*　*ké’*　*nya*?
at　Sumbawa　INTERR　3
（期待される意味）「彼はスンバワにいますか？」

(23) *nya* ***ké’*** *kakan’ tepóng=nan*?
3 INTERR eat cake=that
「彼がそのお菓子を食べるのですか？」

(24) *tepóng=nan* ***ké’*** *kakan’ léng nya.*
cake=that INTERR eat by 3
「そのお菓子は彼が食べるのですか？」

[4] *ké’***が副詞成分内に現れる場合**

以下に例を示す。

(25) *anó-Ahad* ***ké’*** *nya datang kóta*?
Sunday INTERR 3 come to.here
「彼がここに来るのは日曜日ですか？」

(26) *mèsa-mèsa’* ***ké’*** *nya mólé’*?
alone INTERR 3 go.home
「彼は一人で帰りますか？」

(27) *pang’ amat nana* ***ké’*** *nya badagang*?
at market over.there INTERR 3 trade
「むこうの市場で彼は商売をしているのですか？」

この項の冒頭で述べたように、*ké’*の文中での位置は、文の談話の焦点と対応している場合がある。この点については、５で述べる。

３　*mo* (起動・妥当)

mo は意味的には次の２つの機能を持つ。
[1] アスペクトにかかわる機能：ある主体の述部の表す状況への変化を表す。
[2] モダルにかかわる機能：話者がその生起を何らかの形で妥当であるとみなしていることを示す。

各文の訳文は以下のように付けた。[1]のアスペクトに関する機能は、日本語の「～になる」という表現にほぼ相当するため、例文の日本語訳にそれをそのまま反映させた。それに対して、[2]のモダルに関わる機能については、談話から独立した個々の例文の訳にその意味を反映させることは難しいため、訳に反映させない。

以下の部分では、まず3.1で*mo*の表す意味を扱い、次に3.2で*mo*の現れる統語的位置について明らかにする。

3.1　*mo* の表す意味

*mo*はアスペクトにかかわる機能と、モダルにかかわる機能を持つ。それぞれについて順に述べる。

3.1.1　*mo*のアスペクトにかかわる機能

*mo*を含む文は、その状況が成立していない局面から、その状況が成立する局面への変化（いわゆる起動）を表す。*mo*の文の意味は、述部が主要部のみからなる場合と、アスペクト辞*ka*や否定詞*nó*を含む場合で異なる。それぞれの場合について以下に述べる。

[A] 述部が主要部のみからなる場合

*mo*を含む文の意味は述部の主要部の動詞のアスペクト的な特性によって異なる。以下の部分では、動詞をアスペクトに関する特性によって分類し例を示す。

(i) 述部の主要部が静的な状況を表す場合

この場合、*mo*を含む文は、主要部が表す静的な状況への変化を表す。

(28)(29)は述部の主要部が名詞句である例、(30)(31)は静的な状況を表す動詞である例である。

いずれの場合も、*mo*を含む文は、対応する*mo*を含まない文の表す状況の生起（主体の述部の表す状況への変化）を表す。

(28) *tau=Samawa'*　　*aku.*
person=Sumbawa　1SG.LOW
「私はスンバワ人だ。」

(29) *tau=Samawa'*　　*mo*　*aku.*
person=Sumbawa　MM　1SG.LOW
「私はスンバワ人になる。」
（たとえば芝居などで「私はスンバワ人の役をする」というような場合）

(30) *gera'*　　*nya.*
beautiful　3
「彼女は美しい。」

(31) *gera'*　　*mo*　*nya.*
beautiful　MM　3
「彼女は美しくなる。」

(ii) 述部の主要部が動的で持続時間を持つ状況を表す動詞である場合

述部がこの種の動詞のみからなる場合、述部は動詞の表す状況のアスペクトに関しては何も言及しない。(32)のような文は、進行中の状況も、将来実現が予測される状況も、既に終了した状況も表しうる。

(32) *mangan*　*nya.*
eat　3
「彼は食事をしている。」「彼は食事をする（だろう）。」「彼は食事をした。」

一方、*mo*を含む文はその状況の起動を表す。

(33)　*mangan*　*mo*　*nya*.
eat　MM　3
「彼は食事を始める。」

(iii) 述部の主要部が状態の変化とその結果としての状態の両方を表す場合

述部がこの種の動詞のみからなる場合、述部は(i)状態変化がある時点において成立すること、または、(i)基準点において変化の結果としての状態が成立していることを表す。

(34)　*maté*　*tau=nan.*
die　person=that
「その人は死ぬ（だろう）。」「その人は死んだ。」「その人は死んでいる。」

一方、*mo*を含む文は動詞の表す状態変化がある時点において成立することを表す。（結果としての状態は表さない。）

(35) *maté*　*mo*　*tau=nan*.
PERF　MM　person=that
「その人は死ぬ（だろう）。」「その人は死んだ。」

[B] アスペクト辞 *ka*「完了」を含む述部に *mo* が現れる場合

アスペクト辞*ka*「完了」を含む述部に*mo*が現れる場合、その文は述部の主要部が表す状況の起動が基準点以前に位置づけられることを示す。以下の部分では、[A]の場合と同様、動詞をアスペクトに関する特性によって分類し例を示す。

(i) 述部の主要部が静的な状況を表す場合

この場合、述部は基準点以前に動詞の表す状況への変化が成立したことを示す。

(36) *ka*　*mo*　*gera'*　*nya*.
PERF　MM　beautiful　3
「彼女は美しくなった。」

cf. *ka*が単独で現れる場合(第6章1.1.1)

(37)　*ka=gera'*　*nya*.
PERF=beautiful　3　「彼女は美しかった。」

(ii) 述部の主要部が動的で持続時間がある動作を表す場合

この場合、述部は基準点以前に動詞の表す状況の起動が成立したことを表す。

(38) *ka*　*mo*　*mangan*　*nya*.
PERF　MM　eat　3
「彼は食事を始めた。」

cf. *ka*が単独で現れる場合（第6章1.1.1）

(39) *ka=mangan*　*nya*.
PERF=eat　3　「彼は食事をした。」

(iii) 述部の主要部が状態の変化とその結果としての状態の両方を表す場合。
*ka*が*mo*と共起する場合は、状態変化が基準点以前に終了したことを示す。

(40) *ka*　*mo*　*maté*　*tau=nan*.
PERF　MM　die　person=that
「その人は死んだ。」

cf. *ka*が単独で現れる場合（第6章1.1.1）

(41) *ka=maté*　*tau=nan*.
PERF=1SG.LOW=hit　person=that
「その人は死んだ。」
または「その人は死んでいた（が今は生き返った。）」

以上、アスペクト辞 *ka* を含む述部に *mo* が現れる場合を見てきた。そのような文はある状況の起動が基準点以前に起こったという内容を表す。これは上で扱った叙法辞 *mo* が持つ起動の意味とアスペクト辞 *ka* の表す完了の意味の組み合わせであると考えられる。

[C] 否定詞 *nó* を含む述部に *mo* が現れる場合

このような場合については、既に第 6 章 2.1.6 で、否定詞 *nó* が複合形 *nó.mo* および *nó.mongka* を形成しているものとして扱い、その機能について述べた。ここでは改めてこの 2 つの複合形の意味を *mo* の意味と関連付けながら述べる。

第6章2.1.6で述べたように、*nó.mo*と*nó.mongka*は、動詞を主要部とする述部に先行し、ある時点（仮に時点Aと呼ぶ）より前には成立していた状況が、時点Aを境に成立しなくなったということを表す。

*nó.mo*と*nó.mongka*の違いは、時点Aの時系列上の位置に関する制限の有無である。*nó.mo*が時点Aの位置について特に指定しないのに対して、*nó.mongka*は時点Aが時系列上において基準である時点（通常は発話時点）以前に属することを示す。（おおまかにいうと、*nó.mo*は日本語の「もう～しない」と「もう～していない」の両方に相当する内容を表すのに対して、*nó.mongka*は「もう～していない」に相当する内容のみを表す。）

(42)　*nó.mo*　*datang*　*kóta*　*nya*.
not.yet　come　to.here　3
「彼はもうここには来ていない。」
「彼はもうここには来ない。」

(43)　*nó.mongka*　*datang*　*kóta*　*nya*.
not.yet　come　to.here　3　「彼はもうここには来ていない。」

*nó.mo*が表す内容は、ある状況が成立しない状況の生起（ある状況が成立している状況から成立していない状況への変化）であると考えられる。この意味は、*mo*の表す起動の意味と*nó*の表す否定の意味の組み合わせとして考えることができる。

また、*nó.mongka*は、*nó.mo*の表す状況（ある状況が成立しない状況の生起）が基準点以前に成立したことを表すと言える。この意味は、*mo*の表す起動の意味と*nó*の表す否定の意味、および*ka*の表す完了の意味の組み合わせとして考えることができる。

3.1.2　*mo* のモダルにかかわる機能

この項の冒頭で触れたように、*mo*はアスペクトに関する意味を表すと同時に、モダルに関わる意味も表す。*mo*を含む文は以下のような場合に用いられる。

[A] 一般的常識や前後の言語内外の文脈から予測される状況を述べる場合
[B] 時系列に従って連続して起こる状況を述べる場合
[C] 話者がその実現を希望する状況について述べる場合
[D] 話者が自身の制御が及ぶ状況についてその実現を宣言するような場合

[A] 一般的常識や前後の言語内外の文脈から予測される状況を述べる場合

たとえば、食事をする、水浴をする、学校へ行く、帰宅するなど、一日のスケジュールに沿った、当然実現が予測される状況について述べる場合は、*mo*を含む文が用いられる。

(44) (a)　*ka*　*mo*　*mu=mangan*?
PERF　MM　2SG.LOW.AFFIX=eat
(b)　*ka*　*mo*.
PERF　MM
(a)「もう食事しましたか？」(b)「しました。」

(45)　*ka*　*mo*　*mólé'*　*nya*.
PERF　MM　go.home　3
「彼は帰りました。」

このような*mo*の用法は、「対比」を表す叙法辞*si*と比べることによってより明らかになる。*si*は二者択一の質問に対する答えや、一般的通念や先行する状況から想定される事柄と反する内容などを表す叙法辞である。（詳細については7で述べる。）

(46)(47)は「雨が降る」という命題を表す文に、それぞれ叙法辞*mo*と*si*が現れている例である。

(46)　*ujan*　*si*.
rain　MM
「雨が（降らないのではなく）降る。」

(47)　*ujan*　*mo*.
rain　MM
「雨が（予想通り）降るよ。」

*si*を含む(46)は雨が降るという予想が一般的予想や聞き手の予想と反する場合、または、降るか

降らないかを聞かれて答える場合などに用いられ、*mo*を含む(47)は、雨が降るという事態が季節やその日の天候などから前もって予測される事態である場合に用いられる。

次に*mo*を含む文が、先行する文の内容から予測できる状況を表していると考えられる例を挙げる。(48)は子どもを人にやってしまった母親の独白で、(a)の部分で自分が子どもを産んだ後で病気になったこと、当時は母乳以外乳児に与えるものがなかったことを述べ、それに続く(b)の部分で子どもが人に取られたことを述べている。*mo*が現れているのはこのうち、(b)の「子どもが人に取られた」という内容を表す部分である。これは、その文が先行する部分(a)の内容から予測される事柄を示しているためだと考えられる。

(48)

(a)

m.m...	*aku*	*né*
yes	1SG.LOW	you.know

ka=ku=sakét	*ka=ku=naré*
PERF=1SG.LOW.AFFIX=sick	PERF=1SG.LOW.AFFIX=sick.after.childbirth

aku	*né,*	*sakét*	*telu*	*tén.*	*siong'*	*ada'*	*susu*
1sg.low	you.know	sick	three	tahun	not	exist	milk

siong'	*ada'*	*ya=t=bèang'*	*tau=dunóng'*	*rua*
neg	exist	CONS=1PL.AFFIX=give	people=before	it.seems

selén'	*ké'*	*ai-susu-susu*	*ina'*	*baè*
besides	with	milk	mother	only

(b)

ètè'	***mo***	*léng*	*tau=ana.*
take	MM	by	people=over.there

「うん、私はね、病気だったんだよ、産後の肥立ちが悪かったんだよ、三年間病気だった。お乳がなかった。昔は母親のお乳以外人（赤ちゃん）にあげるものはなかった。（それで）人に**引き取られた**んだ。」

[B] 時系列に従って連続して起こる状況を述べる場合

*mo*を含む文は、物語のあらすじを語る場合や、料理の作り方を述べる場合など、時系列上で連続して生起する事態を述べる場合にも観察される。

(49)は物語「ラナンマテの話」からの引用である。登場人物の行動が連続して述べられている部分に*mo*が現れている。

(49)

dadi	*nya*	*belangan*	***mo***	*nya*	*ana*	*mara*	*léng*	*tau=dunóng'*
then	3	walk	MM	3	over.there	like	word	man=before

turén	*semuru*	*entèk*	*semuru*	*dapat*	***mo***	*sópó'*	*dèsa,*
go.down	hill	go.up	hill	arrive	MM	one	village

dapat	***mo***	*tau=nuja'*	*ramè.*
arrive	MM	people=pound	lively

karéng　*ayam=ta,*　*né,*　*sangaro'*　***mo***
and.then　chicken=this　you.know　entrust　MM

pang'　*pang'*　*tau*　*nuja=ta.*
at　place　people　pound=this

「その後、彼は遠くへ**歩いて行った**。昔の人のことばにあるように、谷を降り、山を上りし、1つの村に**着き**、人々がにぎやかに米を搗いているのに**出会った**。そうして、にわとりを米を搗いている人たちのところに**預けた**。」[LM010, 011]

(50)はティモンと呼ばれる料理（一種のおこわ）の作り方を述べた文である。料理のポイントとなる手順を述べる部分三箇所に*mo*が現れている。

(50) *ètè'*　*santong,*　*na,*　*karéng*　*t=óló*　***mo***　*godong'*　*dalam*　*santong.*
get　bamboo　oh　then　1PL.AFFIX=put　MM　banana leaf　inside　bamboo

lantas　*tu=cuci*　***mo***　*lótó*　*tó'*
then　1PL.AFFIX=wash　MM　rice　now

cuci　*lótó*　*dunóng'*　*bisó'*　*lótó*　*dunóng'*
wash　rice　before　wash　rice　before

karéng　*tu=kiki*　*nyér,*
then　1PL.AFFIX=grate　coconut

tu=remés　***mo***　*ana*　*santan*
1PL.AFFIX=squeeze　MM　over there　coconuts.milk

「竹筒を取って、バナナの葉を竹筒の中に**敷きます**。それから米を**洗います**。まず米を洗って、まず米を洗って、それからココナツをすりおろし、（そこから）ココナツミルクを**絞ります**。」

[C] 話者がその実現を希望する状況について述べる場合

*mo*を含む文が発話時点でまた実現していない事柄を表す場合、その文は、[A]に分類したように客観的に実現が予測される将来の状況を表すのに用いられる場合もあるが、話者の主観的な希望を表すのに用いられる場合もある。

たとえば、(58)は聞き手を主体とする「あなたは帰る」という状況を表す文である。このような文は、[A]で扱ったような一般的常識（人は一定の時間になれば自分の家に帰るものだ）や、言語外の文脈（聞き手が立ち上がるなど）から予測される状況を表す場合もあれば、「帰ってほしい」という話者の主観的な希望を述べる場合にも用いられる。

(51) *mu=mólé'*　***mo***.
2SG.LOW.AFFIX=go.home　MM
「あなたは帰るんですね。」または「お帰りください。」

(52)は第三者を主体とする状況を表す文である。このような場合も、*mo*を含む文は客観的な予測と話し手の希望の両方を表しうる。

(52) *nó* ***mo*** *datang* *kóta* *nya.*
NEG MM come to.here 3
「彼はもう来ないだろう。」または「彼にはもう来ないでほしい。」

このような発話は、その表す状況が聞き手の意志によって実現可能なものである場合は、聞き手への依頼として解釈されることが多い。

[D] 話者がその状況の実現を宣言するような場合

話者が自分を主体とする状況を表す文を発話し、その状況の実現を宣言するような場合にも*mo*を含む文が用いられる。(53)はコンサルタントによる作例である。このように、日本人にスンバワ語を教える人が募集されているという状況で「自分が教えます」と申し出るような場合には、*mo*を含む文が用いられるとのことである。

(53) (a) *sai'* *dè=ajar* *tau=Jepang*?
who NOM=teach person=Japan
「誰が日本人を教えますか。」

(b) *aku* ***mo***.
1SG.LOW MM
「私が教えます。（私こそ！）」

(54)は肯定の返事に用いられる*ya*に*mo*が付いた形である。これは日常会話でよく用いられる表現で、例えば言い訳や謝罪などの意図で自分の主張を続ける相手に対して、相手の発話内容に対する自身の了解を伝え、会話を打ち切ろうとする場合に用いられる。これも、当該の文が表す状況（自分が相手の言い分を了解したこと）の実現を宣言する発話であるといえるだろう。

(54) *ya* ***mo***.
yes MM
「わかりました。(もういいですよ。)」

[A]-[D]の用法の共通点を考えると、*mo*は、「当該の文の表す状況の実現を、話者が妥当ななりゆきであるととらえている」ことを示すというふうに一般化しうる。この線に沿って考えるとそれぞれの用法は以下のように考えることができる。

[A]のように「妥当さ」の判断の根拠が、一般的常識など客観的なものである場合は、*mo*の文が表す状況は「予測可能な事柄」と解釈されるものと思われる。

[B]のような「時系列上に連続して起こる状況」は、一連の発話内容の流れ（物語の筋書きや料理の手順など）を把握している話者にとっては、その流れの中での妥当ななりゆきであると判断されるため、*mo*を含む文で表されるのではないかと考えられる。

[C]のような用法においては、話者は実現することに関して客観的な根拠がない事柄を、妥当ななりゆきであるものとして伝えていることになる。そこから、その成立を話者が希望していると

いう解釈が生じるのではないかと考えられる。

[D]のような用法においても、当該の状況はその実現に関して客観的な根拠がない事柄である。この場合は話者が自分で制御可能な状況に関して、その実現を妥当なものとして伝えているというところから、その実現を宣言するという解釈が生じるのだと考えられる。

3.2　*mo* の現れる統語的位置

ここでは *mo* の現れる統語的位置について述べる。前項で扱った *ké'*の場合と同様、*mo* の文中の位置は部分的に談話の焦点と対応している。この項 3.2 では *mo* の現れる環境についてまず網羅的に述べ、*mo* の統語的位置と談話の焦点との関係については 5 で改めて述べる。

*mo*は次の統語的位置に現れる。

[1] 述部内
[2] 動詞を主要部とする述部に先行する名詞句補語内
[3] 副詞成分内

*mo*が[2]の補語内に現れるのは、文に副詞成分が現れない場合だけである。文に副詞成分が現れている場合は、*mo*は[1]述部内と[3]副詞成分内のみに現れる。

以下の部分ではそれぞれの場合について例を挙げる。

[1] *mo*が述部内に現れる場合

*mo*は、述部の主要部の種類を問わず、述部内に現れうる。*mo*は補語に先行する述部内にも、補語に後続する述部内にも現れる。

・述部の主要部が名詞句である場合

(55)　*tau=Empang*　***mo***　*nya*.
　　person=Empang　MM　3
　　（芝居などで）「彼はウンパンの人になる。」

(56)　*nya*　*tau=Empang*　***mo***.
　　3　person=Empang　MM
　　「彼はウンパンの人になる。」

・述部の主要部が前置詞句である場合

(57)　*pang'*　*Samawa'*　***mo***　*nya*.
　　at　Sumbawa　MM　3
　　「彼はスンバワにいることになる。」

・述部の主要部が副詞句である場合

(58)　*mèsa-mèsa*　***mo***　*nya*.
　　alone　MM　3
　　「彼は一人きりになる。」

・述部の主要部が動詞である場合

この場合、*mo*は主要部のみからなる述部の他に、アスペクト辞*ka*, モダル辞*ma, na*, 否定*nó*を含む述部にも現れる。それぞれの場合を順に挙げる。

述部が主要部のみからなる場合、*mo*は述部末に現れる。

(59) *tedu* ***mo*** *nya* *pang* *hotèl*.
stay MM 3 at hotel
「彼はホテルに泊まる。」

(60) *tedu* ***mo*** *pang' hotèl* *nya*.
stay MM at hotel 3
「彼はホテルに泊まる。」

(61) *nya* *tedu* ***mo*** *pang' hotèl*.
3 stay MM at hotel
「彼はホテルに泊まる。」

(62) *kakan'* ***mo*** *tepóng=nan* *léng=nya*.
eat MM cake=that by=3
「彼はそのお菓子を食べた。」

(63) *nya* *kakan'* ***mo*** *tepóng=nan*.
3 eat MM cake=that
「彼はそのお菓子を食べた。」

(64) *tepóng=nan* *kakan'* ***mo*** *léng* *nya*.
cake=that eat MM by 3 「彼はそのお菓子を食べた。」

述部内にアスペクト辞*ka*, モダル辞*ma, na*が現れる場合、*mo*はその後に現れる。

前項3.1で述べたように、*ka*と*mo*が共起した場合は、述部の表す変化が基準となる時点（通常は発話時点）以前に起きたことを表す。

(65) *ka* ***mo*** *rango'* *nya*.
PERF MM big 3
「彼は大きくなった。」

モダル辞*ma, na*の文に*mo*が現れる場合、それに対応する*mo*の現れていない文との顕著な意味の違いは観察されない。(66)と(67)、(68)と(69)は同様の意味を表す。これは、*ma*および*na*が表す内容（願望）と*mo*の表すモダルにかかわる内容（妥当）が似通っているためだと考えられる[2]。

(66) *ma=sia=datang* *kóta*.
DESIRE 2SG.HIGH=come to.here

2　一部の話者によると、このような場合(67)(69)のように*mo*を含む文の方が、対応する*mo*を含まない文(66)(68)より丁寧な印象を与えるとのことである。

「ここにいらして下さい。」

(67) *ma* ***mo*** *sia=datang* *kóta*.
DESIRE MM 2SG.HIGH=come to.here
「ここにいらしてください。」

(68) *na* *datang* *kóta*.
NEG.DESIRE come to.here
「ここに来ないで下さい。」

(69) *na* ***mo*** *datang* *kóta*.
NEG.DESIRE MM come to.here
「ここに来ないで下さい。」

述部内に否定詞が現れる場合、*mo*はその後に現れる。

否定詞*nó*は*mo*またはアスペクト辞*ka*と共起した形*nó.mo*と*nó.mongka*を形成する。それぞれの意味については前項3.1で述べた。

(70) *nó* ***mo*** *datang* *kóta* *nya*.
NEG *mo* come to.here 3
「彼はここに来なくなる。」
「彼はここに来なくなった。」

(71) *nó.mongka* *datang* *kóta* *nya*.
NEG. MM.ka come to.here 3
「彼はここに来なくなった。」

否定詞*siong'*に*mo*が後続する場合は、「～しなくなる、なった」の両方に相当する内容を示す。

(72) *siong'* ***mo*** *datang* *kóta* *nya*.
NEG MM come to.here 3
「彼はここに来なくなる。」「彼はここに来なくなった。」

[2] *mo*が動詞を主要部とする述部に先行する名詞句補語内に現れる場合

以下に*mo*が動詞を主要部とする述部に先行する名詞句補語内に現れている例を示す。

(73) *nya* ***mo*** *datang*.
3 MM come
「彼が来る。」

(74) *nya* ***mo*** *tedu* *pang' hotèl*.
3 MM stay at hotel
「彼がホテルに泊まる。」

(75) *nya* ***mo*** *kakan'* *tepóng=nan.*
3 MM eat cake=that
「彼がそのお菓子を食べる。」

(76) *tepóng=nan* ***mo*** *kakan'* *léng=nya.*
cake=that MM eat by=3
「そのお菓子を彼が食べる。」

[3] *mo*が副詞成分内に現れる場合

以下に例を示す。

(77) *anó-Ahad* ***mo*** *nya* *datang* *kóta.*
Sunday MM 3 come to.here
「彼は日曜日に来る。」

(78) *pang'* *amat=nana* ***mo*** *nya* *badagang.*
at market=over.there MM 3 trade
「彼はむこうの市場で商売をする。」

この項の冒頭で述べたように、*mo*の文中での位置は、文の談話の焦点と対応している場合がある。この点については、５で述べる。

4　*po*（必要な条件）

po はその文の表す内容が、別の状況が成り立つのに必要である条件であると話者がとらえている場合に用いられる。この節ではまず、4.1で*po*の表す意味を示す。その後、4.2で*po*が文中で現れる位置について述べる。

4.1　*po* の表す意味

上で述べたように、*po*は必要な条件を表すのに用いられる。

(79)は会話からの例である。*po*は(b)中の存在詞*ada'*を述部の主要部とする文に現れている。この文（「友だちがいたこと」は、別の状況（「おじいちゃんが遊びに来たこと」）が成り立つために必要な条件を示している。

(79)

(a) *misal* *yang* *datang* *bekadèk* *papén=salaki,*
for example like come play grandparent=male

kó' *balé* *sia* *dunóng'* *né,* *petang-petang* *petang=Ahad.*
to house 2SG.HIGH before you know, night night=Sunday

(b) *datang,* *datang* *si.* *tapi* *nó* *si* *datang* *nonda'* *dengan.*
come come *si* but NEG MM come NEG=exist company

ada'	***dengan-dengan***	***po***.
exist	friends	COND

「たとえば、おじいちゃんがおばあちゃんの家に遊びに来るようなことは？土曜日の夜とかに。」
「来たよ。でも、友だちがいなければ来なかったね。**友だちがいればだよ**。」

実際の発話において、*po*を含む文の表す内容を条件として実現する別の状況（(79)においては「おじいちゃんが遊びに来ること」）が、当該の文に近接する文によって表されることはほとんどない。（そのような例は確認されていない。）

(79)においては、*po*を含む文の表す内容を条件として実現する別の状況（「おじいちゃんが遊びに来ること」）は、先行する文に明確に示されているが、そうでない場合もしばしば観察される。

以下の例においては、「別の状況」は、先行する談話に明示されてはいない。

(80)は，あるお菓子（ワジック）の材料について述べたものである。ここでは「赤砂糖」を表す名詞句が述部の主要部として扱われ、そこに *po* が現れている。*po* を含む文の内容（「（砂糖が）赤砂糖であること」）が、何のための条件であるかは文中に明示されていない。（ワジックを作るのに必要な条件であるということは文脈から自明である。）

(80)

(a)	*gula*	*mira*	*ké'*	*legé*	*baè*	*si*
	sugar	red	with	glutinous rice	only	MM

(b)	*engka*	*balong*	*wajék*	*gula=puti,*	***gula=mira***	***po***.
	NEG.PERF	good	rice cake	sugar=white	sugar=red	COND

(a)「（ワジック（菓子の一種）の材料は）精白してない砂糖ともち米だけ？」
(b)「（そうだよ。）ワジックには白砂糖（精白した砂糖）はよくない。**赤砂糖**（精白してない砂糖）**だよ**。（赤砂糖を使う必要があるよ。）」

(81)も同じテキストからの例である。ここでは、「2 キログラム」を表す名詞句が述部の主要部として扱われ、そこに *po* が現れている。(80)の場合と同様、*po* を含む文の内容（「砂糖が 2 キログラムあること」）が何のための条件であるかは明示されていない。（この場合もワジックを作るのに必要な条件であるということは文脈から自明である。）

(81) (a)	*misal*	*segantang*	*legé*	*pida*	*peno'*	*gula*?'
	for example	3kg	glutinous rice	how many	many	sugar

(b)	***dua***	***kilo-kilo***	***po***	***gula***.
	two	kilogram	COND	sugar

(a)「例えば，3 キログラムのもち米にだったら，砂糖はどのくらい（入れるの）？」
(b)「砂糖は、**2 キロだね**。（ワジックを作るのには 2 キロ必要だね。）」

*po*は，必要や義務などのモダルを表す副詞*harós*「～する必要がある」や*mesti*「～しなければならない」と共起することもある。このような文においては、文の表す状況が別の状況の成立

のために必要であるという内容が、文中の副詞と叙法辞*po*によって二重に表されることになる[3]。

(82)は，物語中の母親と娘の会話である。

(82)

(a)

mé	*lók*	*ma=dadi*	*nyaman,*
which	way	DESIRE=become	comfortable

bau'	*na*	*jina*	*pedas*	*lamén*	*purés.*
can	NEG.DESIRE	too	painful	if	comb

(b)

Dadi	***harós***	*karamas*	*dunóng'*	*ké'*	*nyér*	***po***.
Then	have to	press	before	with	coconuts	COND

「髪を梳くとして、気持ちよくて、痛くないようにするにはどうすればいいの？」
「それなら，まず椰子（の実の中の白いところ）で髪をほぐす**必要がある**ね。」

(83)は、昔のたばこの作り方について述べた文である。

(83)

karna	*roko*	*tau=dunóng=nan*	*ka=jontal*
because	cigarette	people=before=that	from=palm leaf

dadi	***mesti***	*tu=atór*	***po***.
so	have to	1PL.AFFIX=arrange	COND

tu=isi	*jontal=nan*	*ké'*	*mako*
1PL.AFFIX=pot	palm leaf=that	with	tobacco

「昔の人のたばこはシュロの葉で（巻いて）できていたから，（たばこは）必ず（巻いて）こしらえ**なければならなかった**。たばこの葉をシュロの葉につめてね。」

また、*po* がときをあらわす副詞成分内に現れる場合、その文は、日本語の「～（副詞の表すとき）になってはじめて～した」に相当する内容を表す。

(84)は副詞句 *tó'*「今」に *po* が後続している例である。

(84)

tó'	***po***	*ku=kakan'*	*telè*	*penyu.*
now	COND	1SG.LOW.AFFIX=eat	egg	turtle

「私は今（はじめて）亀の卵を食べた。」

*po*がとき以外を表す副詞成分内に現れる場合、その文は、文全体が表す状況が他の状況が成立するのに必要な条件を表す。この点については、4.2で例を挙げて述べる。

3　上記の文において*po*が現れる場合と現れない場合、あるいは副詞が現れる場合と現れない場合で意味の違いが生じるかについては現段階ではわからない。

4.2　*po* の現れる統語的位置

*po*は文中で次の位置に現れる。

[1] 文末
[2] 述部内
[3] 動詞を主要部とする述部に先行する名詞句補語内
[4] 副詞成分内

*po*が[2]の述部内または[3]の補語内に現れるのは、文に副詞成分が現れない場合だけである。文に副詞成分が現れている場合は、*po*は[1]文末と[4]副詞成分内のみに現れる。

前項までに扱った *ké'*と *mo* の場合と同様、*po* の文中の位置は部分的に談話の焦点と対応している。この項 4.2 では *po* の現れる環境についてまず網羅的に述べ、*po* の統語的位置とその意味との対応については次項 5 で改めて述べる。

既に述べたように、会話などの自然な発話では、*po*を含む文の表す条件によって成立する（と話者が想定している）別件の内容は、当該の文に明示されることは少なく、多くの場合、先行する文、または、一般的な知識などから推測される。以下の例文では、このような*po*の文の表す内容に類似する日本語の形「否定の助動詞「ない」＋と」（例：「薬を飲まないと」）を使って*po*の意味を日本語訳に反映させる。

[1] *po*が文末に現れる場合

(85)　*tau=Empang*　*nya*　***po***.
person=Empang　3　COND
「彼はウンパンの人でないと。」

(86)　*pang'*　*Samawa'*　*nya*　***po***.
at　Sumbawa　3　COND
「彼はスンバワにいないと。」

(87)　*nya*　*mópó'*　***po***.
3　laundre　COND
「彼が洗濯をしないと。」

(88)　*nya*　*tedu*　*pang'*　*hotèl*　***po***.
3　stay　at　hotel　COND
「彼がホテルに泊まらないと。」

(89)　*kakan'*　*tepóng=nan*　*léng*　*nya*　***po***.
eat　cake=that　by　3　COND
「彼がお菓子を食べないと。」

[2] *po*が述部内に現れる場合

*po*が文末以外の述部内に現れる例を以下に示す。*po*は述部の主要部の種類を問わず現れうる。

・述部の主要部が名詞句である場合

(90)　*tau=Empang*　***po***　*guru.*
　　person=Empang　COND　teacher
　　「先生はウンパンの人でないと。」

・述部の主要部が前置詞句である場合

(91)　*pang'*　*Samawa'*　***po***　*nya.*
　　at　Sumbawa　COND　3
　　「彼はスンバワにいないと。」

・述部の主要部が副詞句である場合

(92)　*mesa-mèsa'*　***po***　*nya.*
　　alone　COND　3
　　「彼が一人でないと。」

・述部の主要部が動詞である場合

　この場合、*po*は主要部のみからなる述部内に現れるほかに、否定詞を含む述部にも現れる。述部が主要部のみからなる場合、*po*は述部末に現れる。

(93)　*tedu*　***po***　*pang'*　*Hotel*　*nya.*
　　stay　COND　at　hotel　3
　　「彼はホテルに泊まらないと。」

(94)　*kakan'*　***po***　*tepóng=nan*　*léng*　*nya.*
　　eat　COND　cake =that　by　3
　　「彼はそのお菓子を食べないと。」

　述部内に否定詞が現れる場合、*po*は否定詞の後に現れる。

　まず、否定詞*nó*が現れる場合について述べる。この場合、*po*は否定詞*nó*、または、完了を表すアスペクト辞*ka*と複合形を形成する。二つの複合形*nó.po*と*nó.po=ka*はいずれも「未然」の意味を表す。この二つの否定複合形の意味は、個々の構成要素の意味からは予測できない。

(95)　***nó.po***　*datang*　*kóta*　*nya.*
　　not yet　come　to here　3　　「彼はまだここに来ない。」

(96)　***nó.po=ka***　*datang*　*kóta*　*nya.*
　　not yet　come　to.here　3
　　「彼はまだここに来ていない。」

　次に否定詞*siong'*が現れる場合について述べる。この場合、*po*は*siong'*の後に現れる場合と、述部の最後に現れる場合がある。*po*が*siong'*の後に現れる場合は、「未然」を表し、述部の後に現れる場合は、述部の表す内容が、別の状況が成立するための条件であることを表す。

(97)　***siong'***　***po***　*tau=Empang*　*nya.*
NEG　COND　person=Empang　3
「彼はまだウンパンの人ではない。」

(98)　***siong'***　*tau=Empang*　***po***　*nya.*
NEG　person=Empang　COND　3
「彼がウンパンの人以外でないと。」

(97)で否定詞*siong'*と*po*の組み合わせが全体で「未然」を表しうることは、個々の要素の意味からは予測できない。

[3] *po*が動詞を主要部とする述部に先行する補語内に現れる場合

*po*が述部に先行する補語内に現れている例を以下に示す。

(99)　*nya*　***po***　*tau=Empang.*
3　COND　person=Empang
「彼がウンパンの人でないと。」

(100)　*nya*　***po***　*pang'*　*Samawa'.*
3　COND　at　Sumbawa
「彼がウンパンに住んでないと。」

(101)　*nya*　***po***　*mèsa-mèsa'.*
3　COND　alone
「彼が一人でないと。」

(102)　*nya*　***po***　*tedu*　*pang'*　*Hotel.*
3　COND　stay　at　hotel
「彼がホテルに泊まっていないと。」

(103)　*nya*　***po***　*kakan'*　*tepóng=nan.*
3　COND　eat　cake=that
「彼がそのお菓子を食べないと。」

(104)　*tepóng=nan*　***po***　*kakan'*　*léng*　*nya.*
cake=that　COND　eat　by　3
「彼がそのお菓子を食べないと。」

[4] *po*が副詞成分内に現れる場合

4.1で触れたが、副詞成分がときを表す副詞からなる場合とそれ以外の副詞から成る場合で、*po*の機能は異なる。

副詞成分がときの副詞から成る場合は、その表す状況が、文の残余の部分が表す状況が成り立つのに必要な条件を表す。

(105)　*anó-Ahad*　***po***　*nya*　*datang*　*kóta*.
Sunday　COND　3　come　to.here
「日曜にならないと彼はここに来ない。」

(106)　*tén*　*dua-ribu-dua*　***po***　*tèlpon*　*tama*　*kóta*.
year　2002　COND　telephone　enter　to.here
「2002年になってようやくここに電話が入って来た。」

それ以外の場合、つまり、副詞成分が様態を表す副詞、場所を表す前置詞*pang'*の句、時間関係などを表す副詞節から成る場合は、*po*を含む文全体が、別の状況が成立するために必要な条件を表す。

(107)　*mèsa-mèsa'*　***po***　*nya*　*mólé'*.
alone　COND　3　go.home
「彼が一人で帰らないと。」（「一人であれば彼は帰る」という内容は表さない。）

(108)　*pang'*　*amat*　*nana*　***po***　*nya*　*badagang*.
at　maret　over.there　COND　3　trade
「彼はむこうの市場で商売をしないと。」
（「むこうの市場であれば彼は商売をする」という内容は表さない。）

この項の冒頭で触れたように、*po*の文中での位置は、文の談話の焦点と対応している場合がある。この点については、５で述べる。

５　*ké, mo, po*の文中での位置と談話の焦点

叙法辞*ké, mo, po*の位置は、文全体が表す状況の談話の焦点と対応することがある。

2.2, 3.2, 4.2でそれぞれ述べたように、叙法辞*ké, mo, po*はそれぞれ文中で次の位置に現れうる。

[1] 動詞を主要部とする述部内
[2] 動詞を主要部とする述部に先行する名詞句補語内
[3] 副詞成分内

また、叙法辞*ké*と *po*は[1]]-[3]の他に[4]文末にも現れうる。

このうち、叙法辞*ké, mo, po*が[2]の名詞句補語内と[3]の副詞成分内に現れる場合は、それぞれの叙法辞を含む要素の指示物が当該の文における談話の焦点と対応する。まず、[2]の補語内に現れている例を*ké, mo, po*の順に挙げる。

(109)(110)は*ké'*の例である。

(109)では、動作主を表す語*nya*「彼」に*ké'*が後続している。このような文は、他の部分が表す内容、つまり、動作の対象であるお菓子の存在と、それを誰かが食べるであろうことは既に話者と聞き手の間で共有された前提になっており、その動作主体が「彼」であるのか、そうではないのかを問題としている場合に用いられる。

(109)　*nya*　***ké'***　*kakan'*　*tepóng=nan*?
3　INTERR　eat　cake=that

「（他の人でなく）彼がそのお菓子を食べますか。」

(110)では、動作の対象を表す名詞句*tepóng=nan*「そのお菓子」に*ké'*が後続している。このような文は、他の部分が表す内容、つまり、動作主である彼の存在と彼が何かを食べるであろうことは既に話者と聞き手の間で共有された前提になっており、食べる対象がそのお菓子なのかそうではないのかを問題としている場合に用いられる。

(110) *tepóng=nan* ***ké'*** *kakan' léng nya.*
cake=that INTERR eat by 3
「彼は（他のものではなく）そのお菓子を食べますか。」

(111)-(112)は*mo*の例である。(111)のように動作主を表す要素内に*mo*が現れている場合は、誰かがそのお菓子を食べることは既に話者と聞き手の間で共有された前提になっており、その上で「彼」が食べることの妥当さを伝えることが談話の重点である場合に用いられる。また、(112)のように動作の対象を表す要素内に*mo*が現れている場合は、彼が何かを食べることは既に前提になっており、その上で「そのお菓子」を食べることの妥当さを伝えることが談話の重点である場合に用いられる。

(111) *nya* ***mo*** *kakan' tepóng=nan.*
3 MM eat cake=that
「（他の人でなく）彼がそのお菓子を食べる。」

(112) *tepóng nan* ***mo*** *kakan' léng nya.*
cake that MM eat by 3
「（別のものでなく）そのお菓子を彼が食べる。」
「（別のお菓子でなく）そのお菓子を彼が食べる。」

(113)-(114)は*po*の例である。(113)のように動作主を表す要素内に*po*が現れている文は、誰かがそのお菓子を食べることは既に話者と聞き手の間で共有された前提になっており、その上で「彼」がそのお菓子をを食べることが、別の状況が実現するための条件である場合に用いられる。また、(114)のように対象を表す補語内に*po*が現れている文は、彼が何かを食べることは既に前提になっており、その上で「そのお菓子」を食べることが、別の状況が実現するための条件である場合に用いられる。

(113) *nya* ***po*** *kakan' tepóng=nan.*
3 COND eat cake=that
「（他の人でなく）彼がそのお菓子を食べないと。」

(114) *tepóng=nan* ***po*** *kakan' léng nya.*
cake=that COND eat by 3
「（別のものでなく）そのお菓子を彼が食べないと。」
「（別のおかしでなく）そのお菓子を彼が食べないと。」

第５章6.3.5で述べたように、述部に先行する補語は、叙法辞を含まない場合は談話の主題を表す。よってこの位置における叙法辞は、談話の焦点を明示する機能を持つといえるだろう[4]。

次に、叙法辞が[3]の副詞成分内に現れている例を*ké, mo, po*の順に挙げる。いずれの場合も、副詞成分の表す内容が談話の焦点であると解釈される。

(115)は*ké'*の例である。この文は、副詞成分を除く部分が表す状況（「彼が帰る」という状況）が既に話し手と聞き手の間で前提となっており、彼が一人で帰るのかそうではないのかが疑問の焦点となっている場合に用いられる。

(115)　*mèsa-mèsa'*　***ké'***　*nya*　*mólé'*?
alone　INTERR　3　go.home
「彼は（他の人と一緒ではなく）一人で帰りますか？」

(116)は*mo*の例である。この文は、副詞成分を除く部分が表す状況（「彼がどこかで商売をする」という状況）が既に話し手と聞き手の間で前提となっており、むこうの市場でそれが行われることが確言の焦点となっている場合に用いられる。

(116)　*pang'*　*amat*　*nana*　***mo***　*nya*　*badagang*.
at　market　over.there　MM　3　trade
「彼は（他の市場でなく）むこうの市場で商売をする。」

(117)は*po*の例である。この文は、副詞成分を除く部分が表す状況（「彼がどこかで商売をする状況」）が既に何らかの形で成立することが話し手と聞き手の間で前提となっており、その上で、副詞成分が表す状況下でその状況が成立すること（「その市場で行うこと」）が別の状況が成立するのに必要な条件である場合に用いられる。

(117)　*pang'*　*amat*　*nana*　***po***　*nya*　*badagang*.
at　market　over there　COND　3　trade
「彼は（他の市場でなく）むこうの市場で商売をしないと。」

一般に文頭に現れる副詞成分は談話の焦点を表す場合もあれば、特にそのような内容を表さない場合もある。よって、この場合談話辞は談話の焦点を明示する機能を持つといえる。

また、*po*に限っては、[1]の述部内にある場合も、その位置と文の焦点が対応する。

(118)は述部内に*po*が現れている例である。このような文は、動作主である「彼」と「そのお菓

4　動詞の表す動作の関与者が談話の焦点であることを示すのに、ここで扱った叙法辞を用いる方法の他に、名詞節を使う方法もある。たとえば、(a)は文頭の名詞句*nya=Amén*が述部、それに後続する名詞節が補語という構成の文である。このような文は述部のあらわす内容が、談話の焦点であることを示す。(b)((a)に対応する一般の他動詞構文)は文の情報構造を明示しない。

この点については第８章 2.2 で扱う。

(a)(=(8-13))　*nya=Amén*　[***adè***　*ka=samaté=nya*].
TITLE=Amén　NOM　PERF=kill=3　「彼を殺したのはアミンだ。」

(b)(=(8-14))　*ka=samaté*　*nya*　*léng*　*nya=Amén*　.
PERF=kill　3　by　TITLE=Amén「アミンは彼を殺した。」

子」の存在が既に談話に導入されていて、それを（捨てたり売ったりするのではなく）「食べる」ことが、別の状況が実現するために必要な条件である場合に用いられる。

(118) *kakan'* ***po*** *tepóng=nan* *léng* *nya.*
eat COND cake=that by 3
「そのお菓子を彼は（売ったり捨てたりしないで）食べないと。」

この場合も*po*は談話の焦点を明示する機能を持つといえる。

一方、叙法辞*ké, mo*が述部内に現れる場合、また、叙法辞*ké, po*が文末に現れる場合は、それぞれの叙法辞を含む要素の指示物が談話の焦点と対応しているとは限らない。

まず、叙法辞*ké*が[1]述部内に現れている例、および、[4]文末に現れている例を示す。

(119)(120)は、(109)(110)とほぼ同じ内容（「彼はそのお菓子を食べるつもりですか？」）を表す文で、疑問辞*ké'*は、(119)では述部末に、(120)では文末に現れている。この２つの文は、(109)(110)のように、補語の表す内容が談話の焦点である場合も、そうではなく、述部の表す内容が談話の焦点である場合（彼が動作主であり、そのお菓子が動作の対象であることが既に発話の前提となっていて、その二者の間で食べるという動作が行われたのかそうではないのかが問題となっている場合）も用いられる。(この場合、焦点を明示するために、焦点を表す箇所が強く発話される場合がある。) さらに、(119)(120)は文中に特に焦点としてとらえられる箇所がない場合にも用いられる。

(119)*kakan'* *tepóng=nan* *léng=nya* *ké'*?
eat cake=that by=3 INTERR

(120)*kakan'* *ké'* *tepóng=nan* *léng=nya*?
eat INTERR cake=that by=3

(119)(120)[5]：
「彼は（他のお菓子でなく）そのお菓子を食べますか。」
「彼は（他のものではなく）そのお菓子を食べますか。」
「（他の人でなく）彼がそのお菓子を食べますか。」
「彼はそのお菓子を食べますか。」

次に叙法辞*mo*が述部内に現れている例を(121)に示す。この文は(111)(112)のような補語の表す内容に談話の焦点がある文と同様の命題を表すが、ここでは談話の焦点は明示されない。このような文は(111)のように動作主を談話の焦点とする場合も、(112)のように動作の対象を談話の焦点とする場合も用いることができる。

また、(121)は、述部の表す内容が談話の焦点である場合にも用いられる。たとえば、「彼」と「そのお菓子」の存在が既に談話に導入されていて、それを（捨てたり売ったりするのではなく）「食べる」ことの妥当さが談話の重点である場合にも用いられる。(この場合、焦点を明示するた

5　第 5 章 10.3 で述べたように、逆に言えば、このように複数の解釈が可能であることが、(119)において*ké'*を直前の構成要素の一部であると考えるのではなく、文全体の構成要素と考える根拠である。

めに、焦点を表す箇所が強く発話される場合がある。)

さらに、(121)は文全体の妥当さのみを示し、特に文中における談話の焦点が認められないような場合にも用いることができる。

(121)　*kakan'*　***mo***　*tepóng=nan*　*léng*　*nya.*
eat　MM　cake=that　by　3
「彼はそのお菓子を食べる。」
「（別の人でなく）彼がそのお菓子を食べる。」
「（別のものでなく）そのお菓子を彼が食べる。」
「（別のお菓子でなく）そのお菓子を彼が食べる。」
「彼がそのお菓子を、（別な風に処理するのではなく）食べる。」

次に叙法辞*po*が文末に現れている例を示す。(122)は(113)(114)(118)と同様の命題を表すが、ここでは談話の焦点は明示されない[6]。(122)のような文は、(113)(114)(118)いずれにも対応する意味を表す。また、(122)は動詞の表す状況が焦点である場合にも用いられる。(この場合、焦点を明示するために、焦点を表す箇所が強く発話される場合がある。)

さらに、(122)は特に文中における談話の焦点が認められない場合にも用いられる。

(122)　*kakan'*　*tepóng=nan*　*léng*　*nya*　***po.***
eat　cake=that　by　3　COND
「（他の人でなく）彼がそのお菓子を食べないと。」
「（別のものでなく）そのお菓子を彼が食べないと。」
「（別のおかしでなく）そのお菓子を彼が食べないと。」
「そのお菓子を彼は（売ったり捨てたりしないで）食べないと。」
「彼はそのお菓子を食べないと。」

以上、叙法辞*ké, mo, po*の文中での位置と談話の焦点の対応をみてきた。叙法辞はその位置によっては談話の焦点を明示する機能を持つ場合と持たない場合があるといえる。

６　*si* (対比)

*si*は補語内，述部内、および副詞成分内に現れうる。

*si*には次の四つの用法がある。

[A] 対比用法（日本語の「も」に類似した用法。ある事柄を中心として現実世界で成り立つ二つの状況の対比を示す。）
[B] 二者択一の質問に対する答えを示す用法
[C] 一般的通念や、先行する状況から想定される事柄と反する内容を示す用法
[D] 「強調」の用法（「他でもなく～である」という意味を示す。）

6　逆に言えば、このような複数の解釈を許すことから(122)における*po*は直前の要素（前置詞句補語*léng nya*）の構成要素ではなく文全体の構成要素だと考えることができる。

この節では、まず、6.1, 6.2で[A]-[D]の用法について述べる。その後6.3で*si*の現れる統語的位置について述べた後、6.4で*si*の現れる統語的位置とその表す意味との対応を観察する。

[A]-[D]の用法からわかるように、*si*は多くの場合当該の文の表す命題に具体的な情報を付け加えるのではなく、話者がその命題をその発話を含む談話全体の中でどのように位置づけているかを示す。そのため、談話から独立した個々の例文の日本語訳に*si*の意味を反映させることは難しい。以下の例文では、原則として、*si*の意味は訳に反映させない。ただし、上記の[A]の用法においては、*si*は日本語のいわゆる副助詞「も」に近い機能を持つ。この場合は、日本語訳に「も」を用いることによって、その意味を訳に反映させることにする。

6.1　*si* の表す意味

*si*は一部の例外をのぞいて、どのような統語的位置に現れる場合も、文に必須の成分ではない。この節で挙げる*si*を含む文は、ほとんどすべて*si*がなくても文として成り立つ。(例外は*si*が否定詞*nó*と共起する場合である。このことについては6.2で述べる。)

6.1.1　四つの用法の概略

ここでは、6の冒頭で挙げた[A]-[D]それぞれの用法の例を挙げる。

[A] 現実世界において成り立つ二つの状況の対比を示す用法（日本語の「も」に似た用法）

この用法は、*si*が補語内、述部内、および副詞成分内に現れる場合に観察される。

まず、*si*が補語内に現れている場合について述べる。この場合、*si*を含む文は常にこの「対比」の用法を持つ[7]。

(123) *nya* ***si*** *petani,* *nya* ***si*** *guru=SD.*
3 MM peasant 3 MM teacher=elementary.school
「彼は百姓でもあるし、小学校の先生でもある。」

(124) *nya* ***si*** *pang'* *Samawa',* *nya* ***si*** *pang'* *Empang.*
3 MM at Sumbawa, 3 MM at Empang
「彼はスンバワにいることもあるし、ウンパンにいることもある。」

(125) *nya* ***si*** *tedu* *pang'* *hotel,* *tedu* *pang'* *balé* *tau.*
3 MM stay at hotel stay at house person
「彼はホテルに泊まることもあるし、人の家に泊まることもある。」

(126) *nya* ***si*** *manéng',* *nya* ***si*** *mópó'.*
3 MM bathe 3 MM launder
「彼は水浴びをするし、洗濯もする。」

7　(123)-(126)のように*si*が補語内に現れている文は、日本語の副助詞「も」が現れている文と類似の意味を表す。ただし、日本語の「も」を含む名詞句が、対比される事柄それ自体（たとえば(123)においては「百姓」と「小学校の先生」）を表すのに対して、*si*を含む補語は対比される事柄ではなく、対比の基盤となる「共通の要素」（(123)においては「彼」）を表すという点で、二つの要素の統語的役割は異なる。*si*の統語的位置と意味の対応については 6.4 で詳しく述べる。

(123)-(126)においては、*si*を含む文の表す状況と対比される状況は明示されている。しかし、常にこのような明示が行われるとは限らない。以下に例を挙げる。(127)-(129)では、対比の対象は明確に示されていないが、これらの文は*si*を含む文の表す内容と並行的にとらえられるような別の状況の存在を含意する。

(127)　*nya*　***si***　*petani*.
　　3　MM　peasant
「彼は百姓でもある。」

(128)　*nya*　***si***　*pang'*　*Samawa'*.
　　3　MM　at　Sumbawa
「彼はスンバワにいることもある。」

(129)　*nya*　***si***　*mangan*　*pang' ta*.
　　3　MM　eat　at　this
「彼はここで食事もする。」

次に、*si*が述部内に現れている例を挙げる。

((130)は補語内に*si*が現れている(126)と同様の意味を表す。また、(130)'のように、対比の対象が明示されていない文は、対比の対象に関して二通りの解釈を許す。この点も含め、*si*の文中での位置と意味との関係については後述する。)

(130)　*nya*　*manéng'*　***si***,　*nya*　*mópó'*　***si***.
　　3　bathe　MM　3　laundre　MM
「彼は水浴びをするし、洗濯もする。」

(130)'　*nya*　*manéng'*　***si***.
　　3　bathe　MM
「彼は水浴びをする（し、他のこともする）。」
「彼は水浴びをする（し、他の人も水浴びをする）。」

(131)　*nya*　*manéng'*　***si***　*soai'*　*nya*　*manéng'*　***si***.
　　3　bathe　MM　wife　3　bathe　MM
「彼は水浴びをするし、彼の妻も水浴びをする。」

以下は副詞成分が現れている文の述部内に*si*が現れている例である。

(132)　*pang'*　*amat*　*nana*　***si***　*nya*　*badagang*
　　at　market　over.there　MM　3　trade
　　pang'　*amat*　*nta*　***si***　*nya*　*badagang*.
　　at　market　here　MM　3　trade
「彼はむこうの市場でも商売するし、こちらの市場でも商売する。」

(132)’ *pang’* *amat* *nana* ***si*** *nya* *badagang*
at market over.there MM 3 trade
「彼はむこうの市場でも商売する。」

なお、*si*は補語内に現れる場合は、常にこの「対比」の用法で用いられる。述部内に現れる場合は「対比」の用法以外に、以下の[B][C]の用法で用いられることもある。また、副詞成分内に現れる場合は[D]の用法で用いられることがある。

[B] 二者択一の質問に対する答えを示す用法

この用法は、*si*が述部に含まれる場合に観察される。

二者択一の質問（いわゆるYes-No疑問文）に対する答えとしての発話には、かなりの頻度で述部に*si*が含まれる。

会話からの例を示す。(133)は祖母と孫の会話で、「昔の学校」が話題になっている。(a)(c)が祖母の発話、(b)が孫の発話である。

(133) (a) *guru* *tu* *bóé* *mo* *kamaté,* *guru=Tojang,* *guru=Indéng.*
teacher 1PL.AFFIX gone MM PERF=die teacher=Tojang teacher =Inding

(b) *tau=Empang* *dèan*?
person=Empang that

(c) *tau=Empang* ***si***.
person=Empang MM

(a)「私たちの先生は、もうみな亡くなってしまった。トジャン先生、インディン先生....」
(b)「それはウンパンの人？」
(c)「ウンパンの人だよ。」[PA28-29]

[C] 一般的通念や、先行する状況から想定される事柄、または聞き手の想定と反する内容を示す用法

この用法は、*si*が述部に含まれる場合に観察される。以下に例を示す。

(134) *nya* *tedu* *pang’* *Lombok,* *tapi* *tau=Samawa’* ***si***.
3 stay at Lombok but person=Sumbawa MM
「彼はロンボクに住んでいるがスンバワの人だよ。」

(135) *nó=ku=roa* *enti-boat* *tapi* *enti-boat* ***si***.
NEG=1SG.LOW.AFFIX=want work but work MM
「私は仕事をしたくないけど、仕事をするよ。」

[D] 「強調」の用法（「他ならぬ～である」という意味を示す。）

この用法は、*si*が副詞成分内に現れている場合に観察される。(136)のような文は日本語の「他

でもなく～である」という表現に相当する、「強調」とでも呼べるような内容を表す。

(136)　*pang'*　*amat*　*nana*　***si***　*nya*　*badagang*.
　　at　market　over.there　MM　3　trade
「彼が商売をするのは、（他ならぬ）**むこうの市場においてである**。」

6.1.2　*si* に内在する意味

前項で、*si*の用法として次の四つを挙げた。

[A] ある事柄を中心として現実世界で成り立つ二つの状況の対比を示す用法
[B] 二者択一の質問に対する答えを示す用法
[C] 一般的通念や、先行する状況から想定される事柄と反する内容を示す用法
[D] 「強調」の用法（「他でもなく～である」という意味を示す。）

[A]-[D]の用法に共通する点として、何らかの形での「対比」を想定することができるだろう。ここでは、そのような仮定のもと[A]-[D]それぞれの用法を説明する試みを行う。

[A] 現実世界に成立する状況との対比

この場合、*si*が示す「対比」は明確である。

たとえば、例文(137)(=(123))の場合は、[a][a']の二つの状況の対比を想定することができる。

(137)(=(123))　*nya*　***si***　*petani,*　*nya*　***si***　*guru=SD.*
　　3　MM　peasant　3　MM　teacher=elementary.school
「彼は百姓でもあるし、小学校の先生でもある。」

[a] 彼は　農民である
[a]' 彼は　小学校の先生である

この種の発話は、ある個体（この場合は「彼」）を中心に、それに関連する複数の事柄を対比する形で述べるのに用いられる。

前項6.1.1で示したように、[a]と対比される状況[a]'は、先行する文、あるいは後続する文によって明示されている場合もあれば、明示されていない場合もある。

[B] 二者択一の質問に対する答えを示す用法

この場合については、次のように考えることができる。いわゆるYes-No疑問への返答は、二つの選択肢から、一方の可能性を排除し、もう一方の可能性を選び取るという、原理的に、二つの命題の対比を含む行為である。この点で、その種の発話は極性（のみ）が異なる２つの状況の対比を常に含んでいると言える。たとえば(138)(b)(=(133)(c))に関しては、[a][a']のような二つの状況を想定することができる。

(138)(=(133)) (a)　*tau=Empang*　*dèan*?
　　person=Empang　that
　　(b)　*tau=Empang*　***si***.
　　person=Empang　MM
　　(a)「彼はウンパンの人ですか？」(b)「ウンパンの人です。」

[a] 彼はウンパンの人である。
[a]' 彼はウンパンの人ではない。

(138)(b)において、話者は二つの可能性[a]と[a]’を対比した上で、一方([a]’)を排除し、もう一方[a]を肯定しているといえる。

[C] 一般的通念や、先行する談話から想定される事柄と反する内容を表す用法

この場合話者は、先行する談話などから想定される事柄と、それに反する実際に成立している状況を対比しながら述べているといえるだろう。例えば、(139)(=(134))の発話に関しては、次の[a][a]’のような二つの状況を想定することができるだろう。

(139)(=134)	*nya*	*tedu*	*pang’*	*Lombok,*	*tapi*	*tau=Samawa’*	***si***.
	3	stay	at	Lombok	but	person=Sumbawa	MM

「彼はロンボクに住んでいるがスンバワの人だよ。」

[彼はロンボクに住んでいる(前提)]
[a] 彼はスンバワ人である(前提から想定される事柄に相反する事柄)
[a]’ 彼はロンボクの人である(前提から想定される事柄)

[B]の場合と同様、この種の発話においても、話者は二つの可能性を[a]と[a]’を対比した上で、一方([a]’)を排除し、もう一方([a])を肯定しているといえる。

[D] 「強調」の用法（「他ならぬ～である」という意味を示す。）

このような例も話者が２つの状況を対比していると考えることによって説明が可能である。例えば、(140)(=(136))の発話に関しては、次の[a][a]’のような二つの状況を想定することができるだろう。

(140)(=(136))	*pang’*	*amat*	*nana*	***si***	*nya*	*badagang*.
	at	market	over.there	MM	3	trade

「彼が商売をするのは、（他ならぬ）むこうの市場においてである。」

[a] むこうの市場で彼は商売をする。
[a]’ 他の場所で彼は商売をする。

[B][C]の場合と同様、この種の発話においても、話者は二つの可能性を[a]と[a]’を対比した上で、一方([a]’)を排除し、もう一方([a])を肯定しているため、「他でもなく～である」という含みが生じるのだと考えられる。

このように、[A]-[D]の用法は、すべて何らかの形での対比を示していると考えることができる。対比の対象は、[A]の場合には、現実世界において成立している（と話者が考えている）状況であり、それ以外の場合には話者の想定内にのみ存在する現実には成立していない状況である。

6.2　*si* と共起しやすい要素

ある種の否定において否定詞*nó*は*si*と義務的に共起する。また、限定を表す小辞*baè*「～だけ」は談話中で*si*と共起する頻度が極めて高い。ここではそれぞれの場合について、6.1で述べた*si*の意味と関連付けながら述べる。

否定詞 *nó* との共起

否定詞*nó*が叙法辞*si*と共起する形には、二つの形の複合形*nó si*（「非過去」の否定）とそれに完了のアスペクト辞*ka*が加わった形*nó.soka*（「過去」の否定または状態の否定）の二種類がある。

このうち、*nó.soka*が現れる環境は、前々項で示した、一般的に*si*が現れる環境（6.1の[A]-[D]のうちの[A]-[C]）と同様であり、ここでは叙法辞*si*の意味が直接的に否定形全体の意味に反映されている。（この点については第6章2.1.3で述べた。）

一方、*nó si*の用法においては、叙法辞*si*の意味が否定形全体の意味に反映されているとは言えない。第6章2.1.4で述べたように、一般的な状況、および、未来において実現すると想定される状況を表す否定文では、その表す内容の伝達上の位置づけがどうであれ、叙法辞*si*が否定詞*nó*とほとんど常に共起する。

(141)(=(6-78))は、*nó.si*の文で、一般的な状況、および、未来において実現すると想定される状況を表している。

(141) ***nó.si***　*datang*　*nya*　*kó'*　*balé=kaji.*
NEG. MM　come　3　to　house=1SG.HIGH
「(または未来の特定のときに)彼は私の家に来ないだろう。」
「(一般に)彼は私の家に来ない。」

これに対応する叙法辞*si*を含まない文(142)を、聞き取り調査において単独で話者に提示したところ、容認されなかった[8]。

(142) ?***nó***　*datang*　*nya*　*kó'*　*balé=kaji.*
NEG　come　3　to　house=1SG.HIGH
（期待される意味）「彼は私の家には来ない。」

一般に、「否定」は、多くの場合、対応する肯定的な内容と対比しながら何らかの状況を述べる

8　しかし、第 6 章 2.1.1 で述べたように、モダルを表す副詞の否定や仮定を表す文における否定などの特殊な状況を表す場合は、*nó*が単独で(*si*などの叙法辞を含まない形で)述部に現れうる。

第 6 章 2.1.1 で示した例の一つ(6-39)を再掲する。この例文には 2 回 *nó* が現れている。最初の *nó* は、モダルを表す要素 *roa* の否定に、次の *nó* は仮定を表す文に用いられている。

(a)(=(6-39))
ma　*mo*　*panéng'*　*berma,*　***nó***　*ku=roa*　*manéng',*
DESIRE　MM　take.shower.with　together　not　1SG.LOW.AFFIX=want　bathe
nó　*berma*　*ké=nya*　*léng'.*
NEG　together　with=3　word
「一緒に水浴びをさせて下さい。彼と一緒でなければ私は水浴びをしません。」[LK189]

このため、(141)のような例も、適切な文脈があれば容認される可能性がある。ただし、一般的な状況を表す場合、*nó* が単独で用いられにくいのは事実である。

発話であるといえる。否定詞*nó*が、対比を表す*si*と共起することは、このことからある程度説明できる。しかし、否定表現のうちこの環境にのみ*si*がある程度義務的に現れる理由の説明はできない[9]。

限定詞 *baè*「～だけ」を含む発話

限定詞*baè* ‘only’は、ほとんどの場合*si*と共起する。(143)(144)に会話からの例を示す。

(143) (a) *apa*　*adè*　*belajar*　*pang’*　*sekola=dunóng’*?
what　NOM　learn　at　school=before
「(Edot) 昔の学校では何を勉強したの？」[PA015]

(b) *siong’*　*cara=tó’*　*apa*　*peno’*　*suru’*　*tau*　*pina=kemang*
not　way=now　because　many　order　people　make=flower

pina=apa,　*enda’,*　*setera-tera=nan-nan*　***baè***　***si.***
make=anything　not.exist　letters=that　only　MM
「今のようなやり方ではないよ。今は人に花を作らせたり、何だかんだと作らせたり.....そういうのはなかった。読み書きなんか**だけ**だったよ。」[PA016]

(144) *tau=loka’*　***baè***　***si***　*batemóng*?
person=old　only　MM　meat
「（昔は、結婚前の男女の交際はなくて）両親**だけ**が会ったの？（両親だけが会って結婚を決めたの？）」[PA043]

このことは、*si*が持つ内在的意味「対比」と関連付けることができるかもしれない。

baè「～だけ」による限定は、その対象となる特定の事物に関しては当該の状況が成り立つが、それ以外の事物に関しては成り立たないということを表すという点で、潜在的に２つの状況の対比を含んでいるといえる。たとえば、例文(149)の場合は[a][a]’のような二つの状況が対比されており、[a]を選択し、[a]’を排除する形で状況が述べられていると考えられる。

[a] 学校で花の作り方などいろいろなことを勉強する。
[a]’ 学校で読み書きだけを勉強する。

*baè*が高い頻度で*si*と共起することは、このことから説明できる。

9　*nó.si*が用いられる環境において*si*がほぼ義務的に用いられることは、否定詞*nó*の音声に関する属性と関連しているかもしれない。この言語では、強勢を持つ要素は２音節で現れることが多い。*nó*は１音節であるため、単独で現れる場合は、この言語の単語として一般的な音節数を実現するために、叙法辞を伴って２音節の単位を形成するのではないかという仮説も立てられる。

6.3　*si* の現れる統語的位置

*si*は以下の統語的位置に現れうる。それぞれについて以下の例文を参照されたい。

[1] 述部内 (130)-(131), (133)-(135)

[2] 補語内 (123)-(129)

[3] 副詞成分内 (132)(136)

*si*が[2]の補語内に現れるのは、文に副詞成分が現れない場合だけである。文に副詞成分が現れている場合は、*si*は[1]述部内と[3]副詞成分内のみに現れる。副詞成分が現れている文の補語内に*si*が現れている(145)のような文は容認されない。

(145)　**mèsa-mèsa*　*nya*　***si***　*mólé'*　.
alone　3　MM　go.home
（期待される意味）「彼は一人で（行っただけでなく）帰りもした。」

また、*si*は、「とき」を表す副詞句の後には現れない。

(146)　**anó-Ahad*　***si***　*nya*　*datang*　*kóta*.
Sunday　MM　3　come　to.here

*si*は原則としてそれが含まれる要素の最後に表れるが、[2]の述部内に関してはそうであるとは限らない。述部の主要部が動詞で、述部内に否定詞*siong'*、またはアスペクト辞*ka*がある場合、*si*はその後に現れる。

(147)　*siong'*　***si***　*tau=Empang*　*nya*.
NEG　MM　person=Empang　3
「彼はスンバワの人ではない。」

(148)　*ka*　***si***　*datang*　*kóta*　*nya*
PERF　MM　come　to here　3
「彼はここに来た。」

また、前項で述べたように、否定詞*nó*は叙法辞*si*またはアスペクト辞*ka*（完了）との複合形*nó.si*と*nó.soka*を形成する。（*nó.si*の例としては、例文(141)を、*nó.soka*の例としては第６章の2.1.3の(61)等を参照されたい。）

*si*以外の叙法辞は、当該の補語が述部に先行する場合のみ補語内の成分であると解釈されるが、*si*は述部に後続する補語内の成分であると解釈されることもある。たとえば(149)のような文において*si*は直前の構成要素である斜格補語*léng nya*の構成要素であると解釈される。また(150)のような文では*si*は直前の構成要素である主格補語*tepóng=nan*の構成要素であると解釈される。この解釈の根拠については次項で述べる。

(149)　*kakan'*　*tepóng=nan*　*léng*　*nya*　***si***.
eat　cake=that　by　3　MM
「彼はおかしを食べもした（し、他のこともした。）」

(150)　*nya*　*kakan'*　*tepóng=nan*　***si***.
3　eat　cake=that　MM
「彼も（他の人も）そのおかしを食べた。」

6.4　*si* の統語的位置と文の意味の対応

6.1では、*si*を含む文が常に何らかの形で「対比」を示すということを示した。

また、6.3では*si*が次の[1]-[3]の統語的位置に現れることを示した。

[1] 述部内
[2] 補語内
[3] 副詞成分内

*si*によって対比が示される場合、*si*を含む文の示す内容と、対比の対象となる内容には常に何らかの共通する要素があり、それをめぐって並行的にとらえられる事柄の対比が行われる。たとえば、(151)(=(126))においては、動作主である「彼」を「共通の要素」として、それをめぐって並行的にとらえられる状況の対比「水浴びをすること」と「洗濯をすること」が示されている。

(151)　*nya*　***si***　*manéng',*　*nya*　***si***　*mópó ' .*
3　MM　bathe　3　MM　launder
「彼は水浴びをするし、洗濯もする。」

また、(152)(=(131))においては、述部の表す内容「水浴びをすること」を「共通の要素」として、それを中心にして並行的にとらえられる状況「彼が水浴びをすること」と「彼の妻が水浴びをすること」が対比されている。

(152)　*nya*　*manéng'* ***si***　*soai'*　*nya*　*manéng'*　***si***.
3　bathe　MM　wife　3　bathe　MM
「彼は水浴びをするし、彼の妻も水浴びをする。」

文中において「共通の要素」を表す部分は、*si*の現れる位置によって明示される場合とそうでない場合がある。(151)のように*si*が補語内に現れる場合は、「共通の要素」を表す部分は、常に*si*を含む部分（つまり補語）である。一方(152)のように*si*が述部内に現れている場合、また、*si*が副詞成分内に現れている場合は、「共通の要素」を表す部分は*si*を含む部分であるとは限らない。それぞれについて以下に述べる。

まず、*si*が補語内に現れる場合を扱う。既に述べたように、この場合「共通の要素」は常に補語が表す。(153)では、対比の対象は明示されていないが、常に「彼は水浴びもする」という意味を表し、「彼も水浴びをする」という意味は表さない。

(153)　*nya*　***si***　*manéng'*.
3　MM　bathe
「彼は水浴びもする。」（補語の表す内容を「共通の要素」とする解釈）

これは、述部の後に述部の後に現れる補語に*si*が後続する場合も同様である。(154)では述部の後に現れている動作主を表す補語に*si*が後続している。この文においても補語の表す内容（動作

主）が「共通の要素」であると解釈される。

(154)　*kakan’*　*tepóng=nan*　*léng*　*nya*　***si***.
eat　cake=that　by　3　MM
「彼はおかしを食べもした（し、他のこともした。）」
「彼はお菓子を食べもした（し、他のものも食べた。）」

(155)では述部の後に現れている動作の対象を表す補語に*si*が後続している。この文においても補語の表す内容（この場合は動作の対象）が「共通の要素」であると解釈される。

(155)　*nya*　*kakan’*　*tepóng=nan*　***si***.
3　eat　cake=that　MM
「彼も（他の人も）そのおかしを食べた。」

逆に言えばこのような解釈を受けることから、(154)(155)において*si*は文の直接の構成要素ではなく、補語の構成要素であると考えることができる。

次に述部内に*si*が現れる例について述べる。

(156)は述部内に*si*が現れていて、対比の対象が明示されていない例である。この場合、*si*が現れる部分（述部）と「共通の要素」を表す部分とは対応するとは限らない。(156)は「彼は水浴びもする」と「彼も水浴びをする」の二通りの意味を表しうる。

(156)　*nya*　*manéng’*　***si***.
3　bathe　MM
「彼は水浴びもする。」（補語の表す内容を「共通の要素」とする解釈）
「彼も水浴びをする。」（述部の表す内容を「共通の要素」とする解釈）

次に、*si*が副詞成分内に現れている例を挙げる。この場合も、*si*が現れる部分（述部）と「共通の要素」を表す部分とは対応するとは限らない。（対応する場合もしない場合もある。）(157)では、「共通の要素」は、文の副詞成分を除く部分によって表されている。

(157)　*pang’*　*amat*　*nana*　***si***　*nya*　*badagang*.
at　market　over.there　MM　3　trade

pang’　*amat*　*nta*　***si***　*nya*　*badagang*.
at　market　here　MM　3　trade
「彼はむこうの市場でも商売するし、こちらの市場でも商売する。」

一方、(158)は物語の例である。ここでは副詞成分が「共通の要素」を表している。

(158)　*péné’*　*nan*　*dadi*　*mo*　*berma*　*pang’*　*manéng’*　*né*,
short　that　become　MM　together　at　bathe　you.know

ètè=ai’　***ninan***　***si***.
take=water　there　MM

「要するに、それ（水場）は、同時に水浴びをする場所にもなっていて、（人々は）**そこで水もくむ**。」

以上のことから *si* が補語内に現れる場合は「共通の要素」を表す部分と *si* の統語的位置は対応するが、*si* が述部内または副詞成分に現れる場合はそのような対応はみられないということがわかる。

7　叙法辞の機能のまとめ

この章では叙法辞の統語的機能と意味を扱った。叙法辞には次の四種類がある。

(i) *ké’*（不確定）　当該の命題が正しいかどうかが話者にとって不確かである場合に用いられる。

(ii) *mo*　（起動・妥当）　述部の主要部が持続時間を持つ状況を表す場合は、その状況の起動を表す。また、その実現が、何らかの形で、妥当ななりゆきであると話者がとらえている場合に用いられる。

(iii) *po*　（必要な条件）　当該の命題の表す状況の実現が、別の状況が生起するために必要な条件であると話者がとらえている場合に用いられる。

(iv) *si*　（対比）　当該の命題と何らかの形で対比される命題を話者が想定している場合に用いられる。

また、*ké’*　（不確定）、*mo*　（起動・妥当）、*po*　（必要な条件）は、アスペクト、モダルにかかわる内容を表すだけでなく、その統語的位置によって、文全体の情報構造を示す場合もある。たとえば、叙法辞が補語内に現れる場合は、その指示物が談話の焦点であることが明示される。

si（対比）は上記のような一般的な意味での談話の焦点を表すことはないが、その統語的位置によっては、対比における「共通の要素」を明示する。

最後に、叙法辞の機能の一つとして、当該の文の表す内容を、それが含まれる（より広い範囲の）談話の中で「目立たせる」機能があることを指摘しておく。

話者がその文を「目立たせる」意図は叙法辞によって様々であろう。たとえば、*ké’*（不確定）や *mo*（妥当、起動）の用法の一部においては、聞き手への働きかけを効果的に行うことがその意図として想定される。（より具体的に言えば、*ké’*においては「質問」が、*mo*（妥当、起動）の用法の一部においては「依頼」や「宣言」を効果的に行うという意図が想定される。）その他の叙法辞 *po*（必要な条件）と *si*（対比）、および *mo*（起動・妥当）の上に示した以外の用法においては、当該の発話を含む談話の確言の重点であることを示し、情報伝達を効果的に行うという意図が想定される。（このような機能は、前述の *ké’*　（不確定）、*mo*　（起動・妥当）、*po*　（必要な条件）が持つ、文中の焦点を示す機能と何らかの形で関連していると考えられる。）

この点は叙法辞の機能の重要な部分であると思われるが、ここでは詳しく検証することができなかった。今後、テキストを用いてより明確に示していく必要がある。